

【研究ノート】

幼児の音楽表現と幼児教育に関する一考察 —幼稚園にて取り組まれる音楽教育を中心に—

坂田 万代

Consideration about child music expression and early childhood education consisting mainly of music education worked on in (Japanese) kindergarten

SAKATA Mayo

With the cooperation of several Japanese nursery schools and kindergartens featuring music education, this study summarizes features of music education about rhythmique, nursery rhyme and activity of music activity in current use.

In addition, this study considers music education in current use from view point of early childhood education based on kindergarten teaching procedures.

Furthermore, the purpose of this study is to suggest several new possible solutions to the new problems which are found out.

Keywords / rhythmique, nursery rhyme, music expression, music education, kindergarten teaching procedure

キーワード / リトミック、おらべうた、音楽表現、音楽教育、幼稚園教育実践

1. はじめに

近年、保育所や幼稚園とそれぞれ多岐に展開し、様々な特色を持つ幼児教育を展開している。園の教育への考え方や価値観がその園の取り組みに顕著に現れるといっても過言ではないだろう。音楽教育に関してはほどの強みがある一方で、おらべうたやリトミックなど伝統的で古くもあれば、昇進講座を習っている園もあり取り組み方も様々である。今回、その中でも音楽教育を特色としている某園音楽実践研究協議会に協力して頂いた。明徳45年に設立され、某園保育で唯一の音楽教育を専門とした幼稚園である。現在年長17名、年中15名、年少22名、さらには今年度より2歳児15名の入園も始まり、小規模ではあるが音楽教育を中

心に一人ひとりを大切にしながら教育に取り組んでいる。

協同音楽実践研究協議会では、音楽を中心として様々な教育を展開しているため、それぞれの音楽教育の特色をまとめ、教育的な観点から考察していきたい。そしてその結果、幼稚園での音楽教育がどのように今後取り扱われていくべきなのか、また音楽教育の場や手段についても新たな展開をしていくことができればと考えている。

また、協力して頂いた園別音楽実践研究協議会以外にも音楽活動について整理、考察した内容を今後の取り組みに生かして頂く機会として頂ければ幸いである。

1. 種別音楽学校の種別音楽での音楽教育

(1) 音楽指導担当の教師への聞き取り調査

調査をするにあたり、現在、年少から年長までどのような音楽教育が行われているのかを音楽指導担当している教師を対象に聞き取り調査を行った。まず園での音楽教育の現状を把握し、その経緯をまよめていく。

この園での音楽教育の取り組みは、日常的な活動も年間行事としての活動も大きく二つに分かれる。

まず、日常的に取り進まれているのは個人レッスン（年少・年長のみ）・リトミック（年少のみ）・おんべうた（年少・年中・年長）・リコーダー（年長のみ）・音感（年少・年中のみ）である。こゝからは随時別になることもあるが、年間を通して継続的に行われている。また、音楽を扱う教師は園の教師であることとあれば、

外部講師が行うこともある。そして、これらの活動を発表する機会としているのが年間行事としての音楽活動である。ミニコンサート・運動会での歌合戦・お神遊のクリスマスコンサート・クリスマス会でのオーケストラ・物置劇・卒園発表会などが行われている。

今後の研究では、日常的に行われている音楽教育に関して焦点をあてることで取り進められている音楽教育そのものの価値について考察していくことを目指すとするため、年間行事については触れず、また園を例として考察していくものとする。

(2) 音楽教育の内容と年齢

年少での音楽活動は毎日行われる30分間のリトミックが基本となっている。次の表は音楽学校種別は園種で実施されている一週間の例である。

表1 年少でのリトミックの流れ

	うた	おんべうた区	ステップ	ハンドサイン	その他
1学期	ひげじいさん、おんべうた、かたづけトントン、中かたのうた、こぶためきつねこ、おんべうたになっち中かた	オソク おじめは「おあい」でお返事、隠れるハンドサイン	二分音符・四分音符・八分音符	ひげじいさん	スローで手合わせ、二人組で手合わせ
2学期	大きな栗の木の下で、やなぎの下、あひる、よんばねのめね、中かたもやけたかな、やさいのグループ	ミレー・ドレー	1学期のステップに加え、音符カードを使う、音符のさきわけ、ステップ	大きな栗の木の下で、ドレミのうた	自分の音節で伴奏しながら
3学期	こぼれごすけ、おまやめもちま、ごんべうたのあかちん	ミレー・ドレー	1、2学期のステップに加え、柱状のリズムの追加、さつ音符のさきわけ	こぼれご	ひげじいさん、チューリップ

表およびは、まず個人に簡単な手遊びのうたやおんべうたを歌った後、それぞれの名前を音に合わせ呼び、種別が種別音程をつけて演奏をする。次に、季節や種別の発達に合わせた種別な設定をつくり（動物になりきる・車やのりこ・エア・スイミングなど）、二分音符、四分音符、

八分音符を音程にあわせてステップをする。1学期に入るとさらに柱状のリズムのステップも加えられる。そして最後にはハンドサインを用いて簡単な曲を歌う流れとなっている。また、オペラシンやサズ、オスターネットなどを使って簡単な曲のリズムを打ったり、お歌に触れて簡

厚い曲を演奏して楽しむ。これらの曲の内容に關らずスエーデンやポーランド、西獨がユードを虐殺して訪殺を打つこともある。國風が毎回歌まげに染みぬように教誨劇の配劇や工夫がなされている。上述したように年少ではリトミックを中心とした活動であるが、さらに音楽教育においてのリトミックについて考えていく。

ムゼーク・ゲマクツ・デア・カローラ (1898年) 以降の ヴェニス島の作曲家でリトミックを考案した作曲家である。ゲムカローラの教育理念に関して次のように述べておられる。

「ゲムカローラは「芸術活動の基礎はその人の個性及び感情であって、その活動手段はその人自身の身体」であり「人間の個性こそが最大の表現物」とおっしゃる。そして、そのための教育課程を「身体による自己表現、これは文字、楽譜や楽譜などによる表現の形と異に行われる運動を方法」と説明された。彼はさらに、子どもの音楽的能力とその発達への教育方法として、「子どもが音楽的能力は、子ども自身に生じるに依りて進んでリズムの発達に伴い、その程度であるリズムを基本とした教育によって、幼児に音楽的感覚を習得めさせ、それを身体的に発達させていく」とし、すべての子どもの音楽的才能を身体の発達の調子を適して発達させ、音楽的な表現を豊かにしていくこととしたのである。[引用文例「幼児教育・保育士養成のための幼児の音楽教育—音楽的表現の影響—」p.800 以下より、幼児にリトミックの影響を受ける場合、こぼす表現を教えることはできない。本教材の持っている感覚を習得めさせ、身体的に発達させていくことが重要だと述べている。このことも音楽めえんよ。幼児のリトミックは日常生活の経験と切り離して行うことはできない。子ども自身の日常の経験や経験から身体表現を積み重ね、個性豊かな自己表現へとつながっていくことが重要であるといえるだろう。

実際、福野音楽学校創設後の豊洲のオリキケラムも、発達段階の順切である年少にまずリトミックを取り入れることでその後の音楽教育へとつながっていく流れを取り入れており、内閣府も子どもの日常生活からその発達の早い段階から始めるため、リトミックの理念に則している。

また、幼児教育の観点からリトミックを考察していくと、幼児期教育要領の副題「表現」の内容「(18) 音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム運動を繰り返りなどとする楽しみを味わおう」は副題行われているリトミックの内容と一致している。さらに、リトミックでの活動になりきるなどの設定をして楽しむなどの内容で「(19) 自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて楽しんだりする楽しみを味わおう」も含まれると考えられる。幼児期に始めるリトミックと幼児期教育要領副題で示される内容では共通する部分も多く、注目される教育が一致していることが分かる。

次に、年少・年中ではリトミックに代わり音楽のレッスンが明記されている。音楽のレッスンは、年少で切って専ら感性を育てるわらいよりリトミックが明記で取り入れるため、子どもも自然とその中で音楽を楽しむ感覚が見られる。リズム・音階・読み書きなどを中心とした活動であるが、子どもたちの発達に合わせて、日常生活との経験との関係がなからリズムであれば言葉のリズムを重視し、読み書きであれば楽器のイラストなど遊ぶことから始めるなど、子どもの発達に合わせて、楽しめながらレッスンを行う。音楽の内容に則しても、年少のリトミックをさらに発展させていくことからの副題した幼児期教育要領の副題「表現」の内容「(18) 音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム運動を繰り返りなどする楽しみを味わおう」や「(19) 自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて楽しんだりする楽しみを味わおう」に加え、「(4) 感じること、考えことなど自分の身体や動きなどで表現したり、自由に表現したり、つくって楽しむとする」と一致し、幼児期教育要領で定められる子どもの関心と発達しているといえるだろう。

さらに、福野音楽学校創設後の豊洲では年少から年中まで全ての年齢でわらべうたが取り入れられており、音楽教育には欠かせないものとして取り込まれていることがうかがえる。内容としては、わらべうたのありがちな曲としてオアン節式などの節明も取り入れられている。また、わらべうたのリトミックや音楽のレッスンのように

も取られることが多く子どもたちの生活に最も身近な音楽として存在していると思われる。そこで、わらべうたの意義について考えてみたい。

わらべうたは伝承遊びであり、子どもから子どもへと伝えられる子どもの文化である。そして、この伝承遊びのうちをともなっているものがわらべうたであるが、まづはあそびあそびさといふことがとても重要である。あそびさとはより子どもたちはそのあそびのなかでルールを知り、運動性や身体意識を育む、またあそびを通じて、自分の気持ちやことばによって伝えるなどのコミュニケーションをとることができるようになる。さらにそのことは、幼児教育課程開設後の教育・施設及び育ってほしく望んで取り上げられている。つまり、わらべうたは子どもたちの発達に大きく関わり、またそれを教育的に扱うという意識を醸成している。同時に、音楽そのものの力を首からいりよりも遊びを通して音楽が通りぬくようなわらべうた子どもの成長に関わってくるというところが、音楽教育のほぐまりとして自分によりものごましののではなないだろうか。

近年、コージーメソッドも注目し、わらべうたに際してもその強みが見過ごされ積極的に取り入れている園も多く見られる。コージーは自国の伝承音楽を重視し英語でなうことをからはじめた点が注目されているが、日本ではわらべうたが子どもにとってうたのほぐまりとして遊んでいるということが定まるだろう。子どもはわらべうたをあそびのなかで何回も繰り返す口ずさむことにより自然と覚えていく。そのため、覚えて歌えることをその歌で挨拶を取りかかノ態度で自然と歌うことが出来る。さらに、文楽のわらべうたを利用し歌い聞草に二重唱を行うことも出来る。この場合、2重唱例：「かごめかごめ」と「だんごころもさっかっか」などが子どもたち親善となるため、子どもで歌われることなく二重唱で歌うことが出来る。音楽を教えるために技術的な訓練をするのではなく、日常の中で自然と身につく音楽をさらに強調させ、新たな発見を通して子どもたちの想像もより豊かになることもまたわらべうたの大きな魅力の一つだとはいえるだろう。

2 課題と展望

毎朝音楽学校附属幼稚園での音楽教師への取り組みは随分であるが、特徴ある教育を行って行く上で重要なことは子どもが主体となり音楽表現を自ら創し活動的な態度を育んでいるかという点であるだろう。本研究所では取り上げている音楽教育の理念や実践がいずれも幼稚園教育要綱の定める子どもの側と一貫する部分が多く、行われている音楽教育に問題はない。しかし、日々忙しい保育の現場において、例えば幼稚園教育要綱を軸に開発されている音楽教育について見直し、発想教育として大きな視点から見ることでできているかという点をもうほぐさないだろう。

また、毎朝音楽学校附属幼稚園に限らず、音楽に関するレッスンや訓練に関しては先述訓練を認す園も多く、訓練の考え方によっては技術の習得や能力の育成に力を入れることも少なくない。音楽はあくも専門的な教育であり、園によっては外部講師に任せたりするケースも考えられるが、根本にあるのは音楽教育であり、園としてもまずはそのことを忘れてはならない。そして、それ以外の習得を専門とする園に限らずどの園でも共通して考えることである。また、同じ園の中でも音楽を教える教師だけか子どもの様子を知るのではなく、別の教師も子どもたちの発達や成長を知り、共有していくことが重要である。保育を生かして教える音楽教育であっても音楽教育の本来的理念や意義に関して整理した上で、音楽技術や個人発達の養成から子どもたちの成長に積極的に関わり関わりを持ってほしい。

そこで音楽教育の視点からのみでなく、幼児教育の視点から子どもたちの成長や発達を教師が確認しやすくするために、幼稚園教育要綱解釈を参考にしながらこのような項目を整理した。

【表 2】

1	あるページ・音楽活動（ワトニエック・音読）を行う際の子どもの様子・保育者が配慮すること
2	歌詞や歌詞と調し、調わりを覚えるなどおれべうなあそびの活動を導入している
3	おれべうなあそびを通して、相手の気持ちを知ったり、自分の気持ちを知ることができる
4	おれべうなあそびのフレーズを知り、まじりのなかで友達なあそびを導く
5	おれべうなあそびを工夫したり友達と協力しやり進める
6	おれべうなあそびが仲間する楽しさや目標の目的を達成する喜びを味わうことができるようにする
7	おれべうなあそびの中で歌ったり自ら言葉を表現し楽しむ事がみられる
8	あるページなあそびのなかで調になることを楽しんでいる
9	あるページなあそびのなかで音楽のイメージを動きやことばで表現している
10	音楽活動を通して、相手の気持ちを知ったり、自分の気持ちを知ることができる
11	音楽活動で工夫したり友達と協力しやり進める
12	音楽活動の中で歌ったり自ら言葉を表現し楽しむ事がみられる
13	音楽活動を通して楽しむこと、考えのこを音や動きで表現したり、自由にいかれている
14	音楽活動の中で好きな言葉の音を書き、簡単なリズム楽器に触れ、調している
15	音楽活動の中でイメージを動きやことばで表現している
16	音楽活動の中で調になることを楽しんでいる
17	音楽活動での自己表現を奨励し子どもの意欲を促すため、表現を導くことができるようにする

また、次の表は上の項目を達成するにあたり参考にした幼稚園教育要領編の内の内である。

【表 2】

参考にし、内容編	表2項目番号
人間関係 ねらい(2)友達や人と関わり、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛着や目標意識をもつ。	9
人間関係 内容(3)自分の関ったことを相手に伝え、相手の関っていることに気づく。	2, 9
人間関係 内容(4)友達と関して活動する中でまじりの大切さや気持ちを知りやとする。	3
人間関係 内容(5)友達と関して活動する中で、共通の目的を見いだし、工夫したり、協力したりなどする。	4, 10
人間関係 内容の取組(6)①曲調が元気に調わりを深め、表現して楽しようになるため、自ら活動する力を育てようとするとも、曲の曲調と調行調しながら活動を展開する楽しさや目標の目的が達成する喜びを味わうことができるようにすること。	5
表現 ねらい(1)②感じのこもや考えのこも自分のなりに表現して楽しむ。	8, 11
表現 内容(4)感じたこと、考えたことを音や動きなどで表現したり、自由にいかれた、つくったなどにする。	12
表現 内容(5)言葉に楽しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。	13
表現 内容(6)自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、自由に楽しむことができるなどのも楽しむ。	7, 8, 14, 15
表現 内容の取組(6)④活動の自己表現は行事や型で行われることが多いので、教師はそのような表現を奨励し、幼児自身の表現しようとする意欲を促すため、幼児が活動の中で自分のしたい様子を表現を楽しむことができるようにすること。	16

表3の項目には、音楽的な技術や能力の発達にのみ目を向けるのではなく、音楽教育を通して子どもの心の成長・発達を重視した内容が示されている。ただし注意しをなければならないのは、子どもの音楽表現が豊かになることは素晴らしい、しかし、子どもによって仕いかは肉体的に豊かに音楽を感じている状態でもそれをスムーズに表現できない場合もある、それを表現できる手段を考えるのが重要だが、音楽を感じている、そのことを教師はまずしっかりと受け止める積極的に関与したり言葉にしたりしていくことが大切である。作成した項目は、一つの視点であり、表現しているかどうかにのみ目を向けるのではなく、あくまで目の前の子どもがどのように感じているかを第一に教師は意識深く見ていく必要があるだろう。

Ⅲ 今後の研究とまとめ

今回、園児音楽学校附属幼稚園の協力により聞き取り調査することによって行われている音楽教育について「文」で示すように考察することができた。さらに幼児教育の観点からも考察することで課題が見つかり、それに対して新たな提案をすることができた。また、その他様々な発見が得られた。幼児教育の音楽教師がどのように取り組むべきなのか、本来の音楽科定かたを見足を確認することができたように思う。今回の研究では、項目を作成し、調査すること

にとどまったが、今後さらにこの項目をもとにチェックシートを作成し、幼稚園の現場にて活用できるようにしていきたい。そうすることによって、日々忙しい保育者でも音楽教育を行う上で大切にすべき視点が捉えやすくなり、また保育者側も返りにも励むことができる。今後さらにその結果を考察し、新たな研究課題としてまとめたいとも思う。

参考文献

- ① 音楽教育研究協会編 「幼児教育・保育士養成のための幼児の音楽教育—音楽的表現の指導—」音楽教育研究協会 2003
- 中村礼香「表現活動を通して育まれる資質・能力—音楽表現活動に焦点をあてて—」園芸品女子短期大学紀要第54号 68—72頁 2018
- 文部科学省「幼児園教育要綱解説」平成 28 年度本館版編纂 「遊・音楽の表現力を伸ばす保育園・幼稚園から小学校へ」文芸春秋株式会社 2017
- 監修・監訳 小林義典 編訳 高野雅子「表現—幼児音楽 1—」『幼児—幼児音楽 2—』保育出版社 1994
- 大畑洋子 編訳「保育内容 音楽表現(聴覚的)」種彦社 1991
- 吉富尚徳・三村高司 編訳「幼児の音楽教育法 面白い歌声をおがして」ふくろう出版 2009
- ©2019 年 3 月 29 日印刷